



## 「知る」ではなく、 「感じる」生物多様性

水族表現家  
二木あい氏



クジラと共に泳ぐ二木あい氏 ©Darren Jew

——二木さんの表現者としての活動について教えてください。

私は「水族表現家」として水中の魅力を写真や映像、自らも被写体となって伝えています。「水族 (=水に属する部族)」としているのは、自分も水中の生き物も全体が一つの家族であり、全てがつながっているということを人間目線ではなく、彼ら目線で伝えたいからです。

「郷に入れば郷に従え」と言うように、水中は色んな生き物が暮らす場所であり、彼らのお家にお邪魔していることを忘れないようにし、動植物関わらず相手を尊重することが、一番大事なことだと信じ潜っています。そして、水中では「私はずっとここに住んでいましたよ」という風に振る舞うことで、彼らに受け入れられやすくなります。



©Isabel Muñoz

——「生物多様性」について理解を深めるためにはどうすればよいと思いますか。

知識を蓄えていくといった受動的な理解の仕方もありますが、やはり自発的に心から感じる事が大事だと思います。本を読んだり、話を聞いて頭で理解したことより、心が「あっ！」と感じる事柄の方が、ずっと覚えていたりしませんか？ もちろん、大自然の中に飛び込んで実際に体験できるのが一番ですが、きっかけは都市部での日々の生活の中にも満ち溢れています。風や雨の冷たさを実感するなどそうです。それをどう捉えどう感じるか、場所に限らず自発的に「感じ方」を変えることで、私たち一人一人が違うように、生物も一人一人違うことを認め、受け入れ、自分もその一部、地球の一部だと感じる事が出来てきて、生物多様性の理解が深まるのではないかと思います。海も風も雨も動植物も自分も繋がっていることをぜひ「感じて」ほしいですね。

——“自分の内側から自然を感じる”という二木さんの考え方はどのように得られたのでしょうか？

水中から感じ、受け取ったことをみなさんにお伝えしていく中で、「何かが変わる時は、考えて変わるのではなく、心が本当にそうだと感じないと何も変わらない」ということや、自分の活動

は「種まき」であり、その後その種がどう花開くかはみなさん次第なので、強要することではなく、共有することが大切だ、と気づきました。自分を媒体として水中から陸上に伝えているメッセージなのだと思えたことが大きいですね。

——生物多様性を身近に感じるために子どもにどんな経験をしてほしいとお考えですか。

「自分で発見する」体験をしてほしいと思います。ケガの危険が排除された環境で、「10分でこれを体験して下さい」というように用意されたものを大人のペースで行うのではなく、子どもたちのペースで自発的に体験させることが大事ではないでしょうか。例えば自然や生き物を壊してしまうとどうなるのかは、単に教えられるよりも、体験して自分の中で消化することでより強く残るもの。一人一人の感覚とペースで掴み取ってほしいですね。

[聞き手: つな環編集部]

### 二木あい(ふたき あい)

石川県出身。素潜りギネス世界新記録を2種目樹立。水族表現家という日本国内外問わず唯一無二の存在として、水中と陸上の架け橋となるべく世界を舞台に活動。空気ボンベを使わず、海洋哺乳類と同じ様に自分の肺一つで潜り、彼らの中に溶け込むことで仲間の一員となり、被写体として、また撮影者として「私たちは自然の一部であり、自然と共に生きている」そんな繋がりを表現している。